

2017年秋季大会・一般研究発表要旨

デカルト『精神指導の規則』における確実性について

有賀 雄大
(東京大学博士課程)

デカルトの初期作品『精神指導の規則 (*Regulae ad directionem ingenii*)』(以下『規則論』)は、デカルトの思想の中核にある「確実性 (*certitudo*)」の内実に関する重要な手がかりを含む。それは、『省察』において見られるような、いわゆる方法的懐疑の解決と結び付けて捉えられるようになる以前の、確実性概念の姿である。本発表はこの『規則論』を分析することにより、「知識 (*scientia*)」の一側面を明らかにすることを試みた。

1) 『規則論』において確実性そのものについてデカルトが主題的に語る唯一の箇所は「第二規則」である。このテキストを分析すると以下の二点が明らかになる。第一に、蓋然性・確実性の水準は、真・偽の水準とは異なったものであると考えられているということ。例えば二人の相対立する意見を持つ人がおり、そのいずれかが真であるとしても、いずれも確実な知識を持っているとは言えない。第二に、確実な知識を持つ者は、真を偽から常に区別することができる能力を持つということである。

2) 次に『規則論』全体を視野に入れ、確実な知識がいかにして獲得されるのか、という側面から検討する。あらゆる知識は、決して誤らない「知性 (*intellectus*)」の作用によって得られるがゆえに確実であり、その意味で、知識の確実性は知性の作用の確実性に由来する(「第三規則」)。そしてデカルトが自身の方法を「確実な方法」と呼ぶのも、方法が知性の用法を定めるものだからに他ならない。さらに「第八規則」によれば、方法を用いる者は、その方法を用いても知られ得ないものが人間の認識の限界を超えていることを確実に知る。このことから、確実な知識が得られるさいには必ず、それが人間の有する唯一の誤り得ない知性の働きによって得られたということそれ自体についての認識が伴っていると考えられる。

3) 以上を総合すると、確実な知識は、決して誤らないと知られた知性の働きによって得られた、という理由で偽から区別された真なる認識であると考えられる。ところでデカルトは「第八規則」で、この知性の働きについてこれまで論じたことは素描であって、この素描は、人間知性についての本格的な研究によって完成されねばならず、「この[本格的な]研究の中に真の認識手段および全方法が含まれている」と明言する。だが、この研究によって得られた知性の理論を提示した後(X, 412)彼は、それらが「仮説 (*suppositio*)」であってよく、「事物がそのようである」かどうかは問題にならないと述べている。これはしばしば言われるようにデカルトの探求が途上にあったということではなく、仮説であっても十分に用を果たすという意味である。知性の理論は、たとえそれが仮固定されたものであっても、それを持つ者は一貫して真を偽から区別できる。『規則論』期の「確実性」はそうしたある種の暫定性を含んでいたのである。

バシュラールの化学哲学における分類論の検討

上野 隆弘

（大阪大学人間科学研究科博士後期課程）

本発表では、フランス・エピステモロジー（科学認識論）の代表的論者の一人であるガストン・バシュラール（Gaston Bachelard, 1884-1962）の化学の哲学について考察する。よく知られているように、バシュラールは新しい認識が古い認識に「ノン」を突きつけ、かつての誤謬を乗り越えていくものとして科学活動を描いていた。その際、主に検討されるのは物理学の事例である。バシュラールは、相対性理論や量子力学の有する認識論的問題に高い関心を示しており、幾度も言及している。実際、バシュラールのエピステモロジーの中核をなすのは物理学に対する考察であり、そこにバシュラール哲学の特徴が色濃く見出せることは疑いえない。

しかし、これまであまり注目されてこなかったものの、バシュラールは化学史に関する仕事もいくつか残している。代表的な著作として『現代化学の整合的多元論』（1932）と『合理的唯物論』（1953）の二冊が挙げられる。前者はバシュラールのキャリアにおいて前期に、後者は最後の科学論として後期に執筆された。本発表の目的は、両著作においてバシュラールの化学観がどのように変化し、また彼の哲学全体において化学という学問がどのような位置にあるのかを明らかにすることにある。

その際、本発表ではバシュラールの分類に関する考察、見解（一括して分類論と呼ぶ）を軸にバシュラールの化学の哲学を分析する。これまで注目されてこなかったが、分類の問題はバシュラールにとって隠れた問題系であったと考えられる。たとえば、それ自体は周縁的な文献に留まるものの、原子論の歴史を扱った『原子と直観』には「分類の試論」という副題が付されていた。分類という概念をキーワードに設定することでバシュラールの化学哲学の変遷がより明瞭に理解されるだろう。議論の構成は以下のとおりである。

はじめに、前期の化学哲学である『現代化学の整合的多元論』を取り上げ、そこで展開されている分類論を検討する（第一節）。次に、この著作がバシュラールの中心的な思想にどのような影響を与えているのかを明らかにする。ここでは、バシュラール哲学における化学の位置づけ、その一般的な理解を確認する（第二節）。その後、後期の化学哲学である『合理的唯物論』の分類論を検討し、前期の化学観との変遷を明らかにする（第三節）。以上の作業によって、新しいバシュラール像を提示したい。

シモンドンにおける「前個体的なもの」概念の再考

宇佐美 達朗

本発表の目的は、ジルベール・シモンドンの個体化論における「前個体的なもの」概念を検討することで、個体化論を可能とする存在論的な仮説として導入されたこの概念を、シモンドン自身の意図によりふさわしいかたちで提示しなおすことにある。

シモンドンは、1958年に提出した博士論文の主論文『形態と情報の概念に照らした個体化』（以下『個体化論』とする）において、みずからの企てが、個体から個体化を把握するのではなく、個体化から個体を把握する点にあると述べている。前個体的なものは、個体をその発生や生成において捉えようとするこの企てから要請された仮説であり、結晶化における過飽和溶液のように、個体の発生や生成が行なわれる際にエネルギーを供給するものとして概念化されている。したがって、前個体的なものからさまざまな個体が発生し生成する過程を把握することが『個体化論』の目指すところとなり、実際、前個体的なものはあらゆる個体に先立つものとして構想されている。シモンドンは、前個体的なものという存在論的な仮説に基づく把握を、個体を形相と質料からなる合成体とみなす質料形相論とも、個体をそれ自体で存在するものとみなす（あるいはそれ自体で存在する原子の集合とみなす）実体論とも異なるものとしている。

しかし、このような存在論的な仮説は、たとえそれがあくまで仮説とみなされるとしても、問題を惹起するものであるように思われる。なかでも特に問題となるのは、前個体的なものがいかなる意味であらゆる個体に先立つのか、という点であるだろう。メルロ＝ポンティがコレージュ・ド・フランスでの講義の準備ノート（« Notes de travail inédites », *Chiasmi International*, 2005）において疑問を呈しているように、あらゆる個体化、つまりはあらゆる個体が本当に同じ前個体的なものから出てくると考えられるのかが問われなければならない。もし『個体化論』で考察されるあらゆる種類の個体化に、つまり物理的、生物的、精神的、集団的な個体化に、同じ前個体的なものが見出されるのだとしたら、そのとき前個体的なものは、あらゆる存在の質料となる無記的な何か、あるいはあらゆる存在のうちに遍在するスピノザ的な実体に近づくように思われるが、これはシモンドン自身の意図に反すると考えられる。本発表では、物理・生物学的な個体をうみだす狭義の個体化については、シモンドンは確かに同じ前個体的なものを考えているが、それと同時に、精神的・集団的な個体化という第二の個体化において新たに見出されるような前個体的なものを構想してもいることを指摘し、『個体化論』での記述に基づきつつシモンドン自身の概念規定に修正を加えることで、この概念を再定式化する。

ジャン・イポリットの問題系

得能 想平

（大阪大学人間科学研究科 後期博士課程三年）

ジャン・イポリットは二〇世紀後半のフランス思想の中で、三つの観点からよく知られた存在である。第一に、イポリットは、一九四一年にその全体が出版されることとなった『精神現象学』の翻訳と、一九四六年に出版されるそのコメンタリーによって、世界的なヘーゲル研究者として知られている。第二に、哲学と精神分析の関係を論じ、とりわけラカンとの議論によって精神分析に関わっていた哲学者として知られている。第三に、イポリットは、フーコーとドゥルーズといったポスト構造主義の思想家に大きな影響を与えた指導教官として知られている。本発表の目的は、主に第一と第三のイメージ——ドイツ哲学の思想史家というイメージと、バディウが述べるような「新しさの守護者」というイメージ——のギャップを幾分か埋めることにある。

この目的を達成するために、フーコーのある記述に注目したい。それによれば、イポリットは、一九五三年に出版されたヘーゲルの論理学についての著作、『論理と実存』において、「われわれのものであるすべての諸問題」を打ち立てた人物であるとされる。本発表では、当時のアカデミズムにおける背景を必要な範囲で述べながら、『論理と実存』で提出された議論を敷衍することで、イポリットの提出した問題を明らかにする。当時のアカデミズムにおける背景に関しては、Giuseppe Biancoによる研究や、イポリット自身が自身の文脈について語ったいくつかのテキストを参考にする。そのうえで、イポリットのヘーゲル解釈の大枠を確認し、普遍的自己意識や内的差異などの語彙に注目することで、イポリットの問題設定をある種の「矛盾」として提示する。

結論として、われわれは簡単にではあるが、イポリットの問題を当時の思想的な文脈に位置付けることを目指す。ヘーゲル哲学が、フッサールおよびハイデガーとともに、サルトルやメルロ＝ポンティらの実存主義の影響下のもとで、当時のアカデミズムにおいて広く読まれていたことはよく知られている。この文脈における、ヘーゲル哲学の位置づけを確認したのち、ポスト構造主義の思想家との関係、とりわけドゥルーズ哲学においてどのように受容されたかを確認する。本発表は、全体として、これまで区別され別々に論じられることが多かった実存主義、構造主義、ポスト構造主義のあいだに、イポリットの問題設定を通じた連続性を見いだすことになるだろう。

後期デリダにおけるハイデガーの遺産相続—『法の力』と正義

大江 倫子

フランスにおけるハイデガーの受容はアメリカでも関心が高まり、サルトル、メルロ＝ポンティ、レヴィナス、デリダ、リクールの担った役割の重要性が米仏合同シンポジウムで共有された。ここでフランソワーズ・ダスチュールはデリダの思想について、「その大部分が現象学の創始者たちの思想と分離不可能なため、…現象学を伝聞で知るだけの人々には難解である」と述べている。とくに後期デリダは決定不可能、アポリア、他律性、神秘的根拠、厳命などの反哲学的用語を次々に繰り出すことでその難解さが指摘されている。本稿では法社会学分野で関心の高い著作『法と力』に対するジオヴァニス・ゲオルガキスの論文をとりあげ、そこでとくに難解とされているデリダのテクスト抜粋4件について分析し、デリダの正義を以下のように規定し応答を試みている。デリダの脱構築は志向性としての内在的正義であることで存在神論と区別される。この内在的正義は内在的であることにおいて前述定的経験であり、外在的他者によっては脱構築不可能である。しかしこの正義は超越論的でもあることで他者の正義でもあり、つねに検証され内在的にはつねに脱構築途上である。この過程は他者には不可視でありその意味では神秘的である。この正義は実在しないアポリアの経験から触発されることで現前しないが決定に意味を与え導いている。

デリダがつねに検証しつつ暫定的に採用している正義は他者の独異性を尊重する普遍的正義であり、無限の贈与を可能にするハイデガーの正義である。ハイデガーのテクストによればそれは存在者とその存在者性を案出し先行定立するための無根拠の構造としてのGerechtigkeit、古代ギリシャのディケーの訳語として事物の存在論的調和Fugの二つの概念からなる。この両者の差異を知ること、私たちは『法の力』における正義の構造を知ることができる。この脱構築不可能な正義は、ハイデガーが『存在と時間』以来断念し規定することのなかった存在者から見た正義Gerechtigkeitを脱構築の前提条件の志向性として現象学的に位置付けていくものである。これにより現象学の開かれた手続きとしての脱構築と、秘密に留めるべき志向性の領域の境界の構造が、超越論的真理に至る道として記述された。またのちに『マルクスの亡霊たち』で存在の真理としてのFugとの位置関係が強調されるが、ここでデリダはハイデガーの論調が調和へ傾斜することを批判し、調和の不在としての様相を強調している。『法の力』における切迫の含意も、ハイデガーの原義の調和より暴力性を強調している。このことは調和の志向性が他者の根絶に至るリスクを私たちが自覚する契機ではないだろうか。

不連続な時間の哲学 —— ジャンケレヴィッチとレヴィナス

奥堀 亜紀子

『不可逆的なものと郷愁』においてジャンケレヴィッチは、不可逆的な時間が人間の実存様態ではなく唯一の実体性である、言い換えるならば、人間はまったくの時間性であり、それも頭の先から足の先まで、端から端まで、爪の先までそうであるとみなしている。時間と人間の間を論じるジャンケレヴィッチの意図は、私たちが不可逆的な時間の流れに逆らうことができない有限な存在であることを強調するためである。あるいは反対に、未来にしか進むことができない人間が取り消せないものを時間上に残していくことができるという希望を強調することでもある。けれども一方で、『シェリング後期哲学における意識のオデュッセー』において不可逆性は、ギリシア神話の父子関係に生じる状況としても論じられている。本発表の目的は、以上の二つの著作から見えてくるジャンケレヴィッチの時間論を整理していくことである。

ジャンケレヴィッチの時間論の整理を手助けしてくれるのが、ジャンケレヴィッチと同様に、シェリングの『世界の暦年』における父子関係に関連して時間論を展開したレヴィナスである。父子関係を例にしてレヴィナスが時間論を展開しているのは、とりわけ『全体性と無限』第四部と『時間と他者』の繁殖性の問題に関する議論においてである。レヴィナスによれば、父子関係は権能ではなく繁殖性であり、この関係は絶対的な未来ないし、諸世代の不連続性を貫いてより善良なものと化していく無限の時間との関係である。レヴィナスの繁殖性の問題における時間論に影響を与えているのは、ベルクソンの持続概念である。だがレヴィナスは、ベルクソンの連続的な持続の哲学を「不連続な時間の哲学」として展開している。レヴィナスが言うところによると、ベルクソンの考え方は、時間の営みが持続の連続性ゆえに生じた既決事の彼方へ向かうことを明らかにしているが、そのためには連続性の断絶が、そしてまた断絶を介した連続が必要となる。この不連続な時間において、父子関係が成り立つ。

本発表が問題とするジャンケレヴィッチの時間論には、以上のようなレヴィナスの不連続な時間の哲学が提示する問題、まずその哲学が問題とする時間論、つづいてその時間論を前提とした繁殖性の問題が関連してくる。というのもジャンケレヴィッチにとっても、生成は合間という持続の連続性と、不連続な断絶を生じさせる瞬間によってしか構成されないからである。この瞬間の到来により、ベルクソンの連続の連続性に断絶が生じ、不連続な時間において私たちは他を存在させていくようになる。

レヴィナスの不連続な時間の哲学の観点からジャンケレヴィッチの時間論を見直すことを通して、ジャンケレヴィッチもまた不連続な時間の哲学を論じる哲学者として位置づけることができるのか、その可能性を探っていきたい。

デリダと歴史主義のアポリア——フーコー論からグラマトロジーへ

亀井 大輔
(立命館大学)

脱構築を打ち出したジャック・デリダの思想の根底には、〈歴史を思考する〉というモチーフがあるように思われる。とりわけ、インタビュー『政治と友愛』において語られるように、「歴史主義に対する批判」はデリダの歩みにおいて「最初の決定的なモチーフ」であった。本発表の狙いはこの発言を手がかりに、歴史主義をめぐる議論に焦点を当て、1960年代のデリダにおける〈歴史の思考〉を浮き彫りにすることである。

本論ではまず、デリダの歴史主義批判の内実を整理したい。デリダにとって「歴史主義を体系的で厳密な仕方で告発した最初の思想家」はフッサールであった。『厳密な学としての哲学』でのデイルタイの世界観哲学への批判は、デリダにとって歴史主義批判のモデルである。ただし、フッサールが有限な理念をもつ世界観哲学を無限の理念の立場から批判したのに対し、デリダはその立場を共有しない。1964-65年の『ハイデガー』講義の第6回が示唆するように、フッサールの立場も一種の歴史主義に陥ってしまう危険があるからである。それは、〈歴史主義を批判することが歴史主義に帰着する〉というアポリアと表現できる。こうしたアポリアを引き受けながら、いかに〈歴史を思考する〉かという課題が、デリダを脱構築の思考へと促したと考えられる。

そのことを検証するため、次に1963年のフーコー論を取り上げたい。「コギトと狂気の歴史」においてデリダのフーコー批判を支えるモチーフのひとつが、やはり歴史主義への批判なのである。デリダによれば、古典主義時代というフーコーの歴史理解は「全体主義的構造主義」なのであって、フーコーはデカルト哲学が古典主義時代の構造に内属するとみなすことによって、デカルトに対して「全体主義的で歴史主義的な様式のひとつの暴力」を振るっている。それに対してデリダは、デカルトのコギトの思考にこうした歴史主義の閉域を超過する誇張的なものを強調する。こうした歴史論の観点から、いわゆるデリダ-フーコー論争をとらえ直すことも可能であろう。

以上の議論に引き続いて、最後に『グラマトロジーについて』の歴史論を考究する。デリダは西洋の歴史を、ロゴス中心主義と音声中心主義を有する「ひとつの歴史的-形而上学的な時代」と規定するが、その脱構築的な議論は、歴史主義のアポリアをアポリアとして維持しつつ〈歴史を思考する〉試みとして、あらためて特徴づけることができると思われる。

「優美」を巡る思索の限界とその意味 ——ベルクソンの「優美」を中心に——

北 夏子

『意識に直接与えられたものについての試論』（以下、『試論』と略記）の第一章で、アンリ・ベルクソンは、「優美」（grâce）な動きに対して私たちが抱く喜びを分析している。本発表では、1）この優美論は運動変化の考察や恩寵の説明といったものなのか、2）『試論』における「量」と「質」の峻別という主張は優美論で貫徹されているかを明らかにすることを通して、彼の『試論』における優美論の独自性とその限界を明示することを目指した。

本発表ではまず、『試論』の優美論は、「努力の節約」という論点をスペンサーから批判的に受容しているが「努力の節約」が意味する筋肉努力の容易さを論じるだけの理論でもなく、優美の発生という論点を継承しつつもラヴェッソンのように諸関係の「調和」を述べているわけでもないこと、「予告」といった概念を用いて分析された時間についての独自の考察になっていることを明らかにした。また、第一章の「量」的变化と「質」的变化の区別の徹底という論旨と照らし合わせると、優美論に時間一元論ともいべき主張を見て取ることは、第一章の議論全体を破壊することになると指摘した。次に、優美論でも「質」と「量」の両概念の区別が維持されていることを確認し、優美論における時間概念は、外的な運動の推移を「量」的推移として捉え、それとは別に鑑賞者に生じる感情の推移を「質」的進展と捉えることで現出する時間概念であることを示した。更に、優美論でベルクソンが行なったのは量的「運動」と質的「感情」とを区別して論じるということではあったが、「運動」は、計測可能な「量」的側面と、計測不可能な「質」的側面に区別可能であり、「運動」の「質」的側面と、「優美な運動」についての「感情的「質」とにある、「予告」可能性という共通性が、質的時間にも量的時間にも位置づけられない時間の現出の要因であると考えられることを示した。

以上の考察により、本発表は、1）ベルクソンの優美論は、運動変化の美についての考察であるにしてもそれにとどまるものでもないし、恩寵についての説明でもない、時間論であること、2）優美論にも「量」と「質」の区別は維持されてはいるが、「運動」概念が「量」的側面と「質」的側面を持つがゆえに、優美論は時間概念についての詳細な検討を私達に要求することになっているとし、ベルクソンの優美論が時間論と連続的であるという独自性を持ち、運動概念の分析の不徹底ゆえの限界を持っている、と結論づけた。

大他者への侮辱 ——ラカンによるプラトン『饗宴』注釈——

桑原 旅人

プラトンの『饗宴』は、一般的にソクラテスがディオティマという女性に仮託することによって語らせた美とエロスという主題を中心に据えながら解釈がなされる傾向にある。しかしながらフランスの精神分析家ジャック・ラカン（1901-1981）は、講義『転移』（1960-1961）においてソクラテスとアルキビアデスの関係、そしてこの物語の最後の場面におけるアルキビアデスの闖入に『饗宴』の本質的な掛け金を見出そうとしている。

ラカンにとってこの物語におけるアルキビアデスの登場は、決して瑣末な付け足しのエピソードではない。彼らの関係を考える上で、ラカンがまず俎上に載せる主題、それは「愛する者」と「愛される者」との峻別である。そして彼らの関係に当てはめるのであれば、ソクラテスが「愛する者」であり、アルキビアデスが「愛される者」である。だからこそ逆説的に、なぜアルキビアデスが羞恥の壁を越えてまで、饗宴の場に闖入するのかが問題になる。なぜならそのことによって、彼はソクラテスに十分に愛されているにもかかわらず、何かを過剰なほどに欲望しているということが明らかになるからである。そしてラカンは、アルキビアデスの欲望の対象がソクラテスのなかにある「アガルマ」と言う。アガルマとは、主体が対象の背後にそれを見出す特権的な部分対象であり、「宝石」に喩えられるものである。したがってアガルマがアルキビアデスを闖入という侵犯的行為へと掻き立てていると言える。

またラカンはアルキビアデスがソクラテスに対し、まるで女性のように喧嘩を吹っかけていることに着目している。しかしそれはたんに否定すべき下賤な振る舞いではない。むしろ真に男性的な行為は、このような女々しさを通過しなければならない。というのも、ここでのアルキビアデスの目的は、大他者（Autre）という特権的な地位に位置づけられるソクラテスをその断片である対象 a （objet petit a ）へと引きずり降ろそうとすることだからである。これは『無意識の形成物』（1957-1958）において導入される大他者（=シニフィアンの宝庫）の欠如（ A ）、すなわち象徴界の機能不全の問題系と接続し得る。アルキビアデスの闖入、すなわち大他者への侮辱によって、欲望し、誰よりも能動的で愛する者であったソクラテスは、貶められ、愛される者になる。

本発表は、とくに大他者 A の小文字の対象 a への墜落の結果として生じるその欠如（ A ）の問題系、そしてこの「愛する者」から「愛される者」への移行に着目し、ラカンのプラトン『饗宴』注釈におけるアルキビアデス闖入への着目が、彼の理論における象徴界の地位低下を確定的なものにしていることを明かす。

デカルト渦動説の成立 —原理と現実のはざままで

佐藤 真人

(日本学術振興会特別研究員PD・東京大学)

ニュートンの万有引力説によって斥けられて以来、デカルトの渦動説は誤った宇宙論として科学史上で触れられる他は、自然科学の分野で顧みられることは稀である。しかし哲学の観点で見ると、これを単なる誤謬として斥けるわけにはいかない。ましてやデカルト哲学においては、哲学者自身が繰り返し強調したように、すべての知識は密接に関連しており、その中の一つを抜き出せば、緊密に織り成されたデカルト哲学全体の理解にも影響が及ぶ。渦動説を誤りとして排除すれば、それが哲学者の体系の中で果たした役割を見誤ることになる。とはいえ、渦動説の意義を見極めるのは困難である。デカルト哲学の研究の深化とともに、近年では例えばシュースターの広範な分析のように、渦動説をも含んだデカルト自然哲学の研究が増えつつあるが、その解明はまだ充分とは言えない。

デカルトの自然学研究は、ベークマンからの問題提起による落体問題を、理想的な条件下で考察することから始まった。理想的な条件とは真空状態である。ベークマンは真空の存在と慣性の法則を既に認めていたが、真空を否定するデカルトは落体問題を数学上の考察として捉え、これを自然学上の問題として捉えるベークマンとは隔たりがあった。一方でデカルトは、優れた自然学者たるベークマンに触発され、慣性と運動保存について述べた自然法則の第一・第二を確立している。運動の原理や光学、虹について正確に考察し、自然学研究においても数学者としての卓越した能力を示したデカルトは、天体の運動や重力の解明ではなぜ誤ったのだろうか。

本稿ではまず、デカルトが自然学で採用した独自の数学的な証明方法を、特に『世界論』を中心とした自然学上の叙述を通じて検証する。これにより、『世界論』と『方法序説』の記述の相違を明らかにしつつ、形而上学を根拠にしたデカルト自然学の仮説の意義と真理性の構造を浮き彫りにする。次に自然を規定する原理と、自然法則に従った世界の自律的な発展とその物理的帰結を追跡する。特に、物体運動への空気の影響からデカルトが着想した、宇宙を満たす微細物質の特殊な働きを検証する。さらに、微細物質の理論がデカルト自然学においてどのように成立したかを追いつつ、微細物質が現実に果たす機能の両義性を、デカルトの光論に依拠して分析する。

以上の考察を通じ、形而上学に支えられた原理的な規定にも係らず、自然法則がそのままでは現実世界で観察され得ないデカルト自然学において、微細物質が果たす複雑な役割を、数学・自然学・形而上学を視野に入れ、多重的に検証することを本稿の最終目的とする。

マルブランシュの「神の一般意志」から ルソーの「人民の一般意志」へ

竹中 利彦

この発表では、「一般意志」という概念のニコラ・マルブランシュからジャン＝ジャック・ルソーにいたる世俗化の経緯において、それが神の意志から主権者としての人民の意志になる過程で、どのような変化を受けたのかについて考えたい。

ジュディス・N・シュクラーやパトリック・ライリーなどの研究によって知られているように、ルソーにおける「人民の一般意志」という概念が、マルブランシュの「神の一般意志」という概念にその源流をもつ。そのため、これら両概念には顕著な共通点がある。

共通点の第一は、一般性の肯定的評価と個別性の否定的評価である。まずマルブランシュにおいて、神は基本的に一般意志によって行為し、個別意志によっては行為しない。それは、神は世界の創造の際に自らが立てた一般法則によって行為するということであり、（若干の留保のもとにであるが）個別意志によっては行為しない。すなわち、神は創造の際、あらゆる可能な世界のうちで最も完全な世界を現出させるために、一組の一般法則を立てた。神の行為はそれらの一般法則にのっとっているのであり、われわれ人間にとって個別意志による行為、つまり奇蹟に見えるものが自然法則に反しているとしても、より高次の一般法則、すなわち最完全な世界の現出と維持のための法則には従っているのである。そしてルソーにおいては、社会は一般意志、すなわち共通の利益を目指す意志によって形成されるべきであり、私の利益を目指す個別意志、そしてその集合である全体意志によって左右されるべきではない。

共通点の第二のものとして、両者の一般意志は自由にかかわる、ということが挙げられる。マルブランシュにおいて、神は可能な限り最完全な世界を創造し維持するために、自らの知性が考案した一般法則に従うことを意志する。また、ルソーにおいても、人民は自らの一般意志から出てくる法に従う。マルブランシュにおいて、自らの知性による法則に従う神はもちろん自由なものであり、またルソーにおいても、自ら課した法に従うことが「自由の境界」だと述べられている。

しかし、いわば「神の声」が「民の声」に変わる際に、「一般意志」の概念にも異なった点が出てくる。この発表ではそれがどのような相違なのかについて検討してみたい。

複数世界は存在するか —マルブランシュにおける神の選択と自由と—

橘 英希

マルブランシュにおいて、神による世界の創造とは、無数の可能世界のなかからある一つを選択しそれを現実化することである。マルブランシュによれば、そのなかには神の属性を最も表現する度合いの高いものが存在し、神はそれを選んだ。ある意味での最善世界が存在するのである。従来、マルブランシュの解釈たちは、ライプニッツと彼とでは「最善」の意味するところが異なるとはいえ、両者はともにそれぞれの意味での最善世界がただ一つだけ存在し神はそれを必然的に選択するとの考えを共有していたと指摘してきた。しかし、最近、Schmaltz は、マルブランシュの体系においては最善世界が複数存在することが可能であると指摘した (Tad M. Schmaltz, Malebranche and Leibniz on the Best of All Possible Worlds, 2010)。そしてこの点においてライプニッツとの違いは顕著であり、マルブランシュにおいては十分な理由の原理は認められていないのだ、と。

最善世界の存在について、存在か非存在かという点だけではなく、ただ一つだけ存在するか複数個存在するかという点もがマルブランシュにおいては問題となるとの指摘を初めて行った Schmaltz の研究を踏まえて、本発表は次のことを主張したい。第一に、Schmaltz の指摘はまったく正しく、最善世界の複数説はマルブランシュにおいて論理的に可能な立場である。ただし Schmaltz のこの点についての議論は非常に簡素であるので、あらためてマルブランシュの創造論から説き起こし、整理を与えたい。そして、第二に、複数説は論理的に可能な立場であるだけでなく、マルブランシュが実際に採用した立場でもある。この点において、本発表は、従来の伝統的解釈にしたがう Schmaltz に同意しない。神の知性には最善世界が実際に複数存在したのだ。そしてそのなかから神の意志は無差別の意志によって、つまりまったくランダムな仕方である一つを選択した。そうして現実化されたのがこの現実世界なのである。従来の解釈者たちは、マルブランシュは唯一説を採用しており、神の選択には必然性が伴うとしてきたが、本発表によれば事態は逆である。このことを、自然科学の方法論における一見奇妙な言明、すなわち「実験はある種の啓示である」の解釈をもとに示したい。

デカルト形而上学における「経験」の機能 ——「直観」および「知解」との対照において——

田村 歩

哲学の目的は真理——これを如何に定義するかについては言及しないとして——を探究することである。しかしその真理を探究するためには適切な「方法」が必要なのであって、哲学の歴史は、常に方法論の歴史と共にあったといえるだろう。そしてデカルトは、「方法なしに事物の真理を探究するよりは、むしろ事物の真理を探究しようなどとは考えない方が遥かにましである」（*Regulae.*, AT-X, 371.）と述べているように、学問における「方法」の重要性を最も強調した哲学者の一人である。ではデカルトにとって真理の探究、すなわち学問に必要とされる「方法」とはどのようなものであるのか。周知のようにそれは、「純粹で注意深い精神の、私たちが理解するものについては懐疑の余地をまったく残さないほど容易で判明な把握作用」（*Ibid.*, 368.）としての「直観 [intuitio]」および「確実に認識されたある別の事がらから必然的に結論されるすべてのもの」（*Ibid.*, 369.）としての「演繹 [deductio]」であり、そして「それ以外の方法では学問は得られない」とされる。しかし彼は規則2において、つまり、学問の方法として先の「直観」と「演繹」とを呈示するのに先立って、次のようにも述べている。

「[...] 私たちは二つの方法、すなわち「経験 [experientia]」あるいは「演繹」によって事物の認識に到達するということに注意しなければならない」（*Regulae.*, AT-X, 365.）

この「経験」という語は後の諸著作にも散見されるものであり、これが彼の形而上学において何かしらの不可欠な機能を有していることは推測に難くない。しかも、「直観」や「演繹」が『諸規則』以降主題的に扱われなくなる¹⁾一方で、「経験」は『省察』および「反論と答弁」・『哲学原理』・『ビュルマンとの対話』・『真理の探究』でも継続的に使用されているのである。本稿では、デカルト的「経験」に関する全面的な解釈の一端として、『諸規則』でいわば萌芽的に扱われている「経験」が、〔後の〕形而上学において、「直観」や「知解」と如何なる関係にあるのかを分析・考察することにしたい。

1) 村上勝三によれば、「[第3規則]」での deductio と inductio との言い換えの不安定さが象徴的に示しているように、デカルトは「直観 intuitio」と「演繹 deductio」を方法概念として鍛え上げるということとはなかったと考えられる。この二つが『省察』においても『哲学の原理』においても重要な概念として主題になることはない。Cf. 村上勝三「コメント」（『国際哲学研究』、国際哲学研究センター、2号、2013年）、64頁。

ジル・ドゥルーズ『差異と反復』における回帰と信

戸澤 幸作

本発表は、ジル・ドゥルーズ哲学における「信仰(foi)」と「信(croyance)」の問題に着目し、彼の最初の名著『差異と反復』における時間と反復の検討を通じて、この二つの概念の差異を踏まえつつ、彼の哲学において「信じる」という語が担う特異性の一端を解明することを目的とする。

ドゥルーズ哲学には、ニーチェを踏まえたキリスト教信仰への苛烈な批判が散見される一方で、この信仰と対比的に用いられる「信じる」という語の肯定的な使用が見られる。すでにしてドゥルーズの生前に公刊された研究においても、フランソワ・ズーラヴィシュビリが「この世界への信」「将来への信」というドゥルーズの言葉に注意を促していた(François Zourabichvili(2005[1994]), p. 69)。とはいえ、ドゥルーズ哲学のこうした側面が彼の哲学の核心に位置するものであると看做されることは稀である。そもそも、哲学にとって「信じる」という語は警戒すべきものである。なぜなら、それは思考をそれ以上進めない行き止まりに追いやり、超越的な価値への無条件的帰依を迫り、私たちが現状肯定に押し込めるものだからである。『ダーク・ドゥルーズ』(Andrew Culp, 2016)の著者は、「私たちはこの世界を信じる理由を必要とする」というドゥルーズの言葉を批判的に取り上げ、反対にこの世界への憎悪を説く。こうした言明は、「信じる」という語の位置が曖昧なままであるために出てきたものである。

ところで、『差異と反復』における時間論において、ドゥルーズはその鍵となる第三総合に位置する永遠回帰の反復について、「永遠回帰は、ひとつの信仰ではなく、むしろ信仰の真理」(DR127)であり、「将来を信じること」(DR122)であると語っている。これらの印象的なフレーズに見られるように、かれの「信仰」と「信」に対する思考は、『差異と反復』の核心である時間論における反復概念の彫琢のなかで顕在化している。ところが、ドゥルーズ哲学における時間論の解明は上記引用箇所を含む第2章の検討だけでは十分ではない。ここでの反復概念の彫琢は、同書第4章の現代数学を対象とする議論へと接続され、エヴェリスト・ガロアを下敷きとする「[体の付加]の漸進性」(DR272)の検討に結実する。

従って、本発表の企図は、これまで主として『差異と反復』第2章の検討に集中してきたドゥルーズ哲学における時間論の解明を同書後半の議論にまでダイレクトに接続し、「純粋に論理的で理念的ないしディアレクティックな時間」(ibid.)の内実とその鍵概念としての(永遠)回帰への理解を深化させ、そこでの「信」の位置を問うことである。

臆病さは悪を招くか——レヴィナスとヴェイユ

根無 一行
(大谷大学任期制助教)

レヴィナス哲学はその前期以来一貫して、非人称性から脱出した主体を非エゴイスティックな仕方でも描き出すことを主題にしている。レヴィナスが「他者に対する責任」を語ったことはよく知られているが、それは、他者を我有化することのない主体性が「責任」に見て取られるからである。

『全体性と無限』（1961年）頃の中期までのレヴィナスは「責任」を「正義」という言葉でも語っていた。しかし、後期になると「責任」と「正義」は概念的に明確に区別されることになる。本発表が検討したいのはこの後期「正義」概念である。

後期正義概念が問題にするのは、果たすべき「責任」のある他者がもう一人いる可能性である。そして、「比較しえないものの比較」というこのアポリア的作業をレヴィナスは「必要暴力」だと言う。この状況そのものは「責任」から発生したものである。それゆえ、「正義」は自らに「身震い」しながらなされなければならない、その意味である種の「弱さ」が必要である。だが、「臆病さ」があっては「正義」はなされえない。「残虐さ」は拒絶せねばならないがしかし「暴力」は「必要」だというこの事態、それをレヴィナスは「雄々しさの臆病さなき弛緩」と表現する。

レヴィナスがこう考える背景にはアウシュヴィッツを巡るユダヤ教とキリスト教の関係がある。レヴィナスからすれば、イエスの「ケノーシス」はナチズムの悪を止めることができない「無力」なものであり、必要なのは「勇気」のある「悪との戦い」だったからである。脅かされた隣人は「防衛」されねばならない。ここから、あたかも「身震い」しさえすれば「正義の暴力」はゆるされるかのように、レヴィナスはパレスチナに対してほぼ全面的に否定的な態度を取っていくことになる。だが、パレスチナも「隣人」ではないのか。

ここでシモーヌ・ヴェイユを参照したい。1939年のナチス・ドイツのチェコ侵攻に直面したヴェイユは、自らのそれまでの非暴力主義を捨てて「勇敢」であらねばならないと考えた。そうすると興味深いのは、ヴェイユがフランコ軍に対峙する人民戦線軍に加勢すべくスペインに駆けつけたのが、実に1936年、ヴェイユが非暴力主義を棄て去る前だったという事実である。ヴェイユはまさにそのスペインで「敵」の処刑の場面に立ち会った。その時のことを、のちにヴェイユは「もし幸運な偶然が死刑執行を妨げなかったならば私は何をしていたか今でもわかりません」と回想した。

ヴェイユは、非暴力主義者でありながら「正義」の戦争に加担しようとした、あるいは、「正義」を行使すべく参戦した戦争の中でしかし殺人を制止しようとしたわけである。この矛盾する態度を可能にしたもの、それは「臆病な正義」と概念化できるものではないか。レヴィナス哲学にこの概念を投げかけることで、何が見えてくるだろうか。

『創造的進化』における〈生命〉探究の方法 — 〈経験に基づく推論〉の解明

野瀬 彰子

本発表は、『創造的進化』においてベルクソンが〈生命〉(la Vie)について探究するために用いる方法を解明及び検討することを目的とする。

『創造的進化』からベルクソンは、われわれ人間を含むあらゆる生ける存在を創造するものとして、〈生命〉という概念を導入する。だが、われわれ人間が、自らを創造した〈生命〉について知ることなどできるのか。ベルクソンは、『創造的進化』の序において、確かに〈生命〉について推論のみによって探究することはできないが、それでも経験に基づきつつ推論を行えば〈生命〉についていくらか知ることができると主張する。ベルクソンが『創造的進化』の序で示すこの方法を本発表では〈経験に基づく推論〉と呼ぶ。何ゆえ〈経験に基づく推論〉によるならば〈生命〉について探究することができるのか。本発表では、〈経験に基づく推論〉を解明することで、われわれが自らを創造した〈生命〉についていかにして知ることができるのかという問いに答える。

本発表では、直観と知性という二種の知についてのベルクソンの理論から、何ゆえ経験に基づくことで〈生命〉について探究できるのかを説明する。〈経験に基づく推論〉が〈生命〉の探究を可能とするのは、どんな経験も直観という絶対的なものの知に裏づけられているからである。そして、本発表ではとりわけ、〈経験に基づく推論〉が、〈私の意識〉についての経験だけでなく、私以外のものについての経験をも参照していることに注目する。『創造的進化』において、ベルクソンは〈私の意識〉についての無媒介の直観だけでなく、私以外のものについての直観的な知の存在を認めているのである。私以外のものについての直観的な知をベルクソンは類比(analogie)と呼ぶ。私以外の生けるもの及び生気のないものについての類比が在るからこそ、生けるものと生気のないものとの区別、そして生けるものと生気のないものとの対立関係について指摘することができ、さらには〈生命〉についての理論を構築することができるのである。

『創造的進化』において当時の生物学が観察や実験によって明らかにした事実をベルクソンが肯定的に受容していることは、広く知られている。本発表では、それが生物学的事実も私以外の生けるものについての類比に裏づけられているからであることも明らかになる。ただし、生物学的事実、〈生命〉についてのベルクソンの理論の構築に不可欠だというわけではなく、当の理論の確からしさを増大させるという役割を担うのみである。ベルクソンは〈経験に基づく推論〉によって構築した〈生命〉についての理論と生物学的事実とが矛盾しないことを確認することで、当の理論の確からしさを増大させていく。このような生物学的事実の位置づけも本発表で明らかにされる。

現在主義の起源 ——『物質と記憶』における「私の現在」をめぐる

原 健一

ベルクソンは『物質と記憶』において、「私の現在」という時間経験にかんする概念を提示している。この「私の現在」を通してベルクソンは、主観的な時間経験における現在を、幅をもたない「数学的な点」と捉える考え方を斥け、そこには常に一定の持続が伴っていると主張する。この主張は、ジェイムズの「見かけの現在」やフッサールの「内的時間意識」、「把持モデル」や「延長モデル」といったものと比較・対照が試みられるなど、多くの可能性に開かれたものと見なされている。

しかし、ベルクソンが「私の現在」という概念を『物質と記憶』第三章で導入した根本的な動機についてはあまりはっきりと理解されていないのではないかと。——彼には、主観的な経験の生き生きとしたあり方、連続的・流動的なあり方を捉えようという根本的な哲学的動機があった。前著『直接与件』のときから、あるいはベルクソンの全著作を通して、そうだったことは自明ではないか。——だが、『物質と記憶』第三章にはある明確な目的がある。その一つが、現在主義を斥けて、過去の実在性を肯定するというものである。そうである以上、「私の現在」を導入した動機は、この目的の達成との関連で語られるべきであろう。ところで、主観的な経験が持続をもち過去を含むという主張と、過去がそれ自体で客観的な実在性をもつという主張は、一見したところ別の主張であり、両主張は即座につながりをもつわけではない。してみれば、ベルクソンはなぜ、「私の現在」という主観的時間経験にかんする概念を導入することが、過去の客観的な実在性を肯定することにつながると思ったのだろうか。これが本発表の問いである。ベルクソン哲学全体に通低する動機を指摘したところで、この問いに対する答えとはなるまい。

この問いに応答するには、「私の現在」という概念が、過去の実在性を肯定するという『物質と記憶』第三章の議論の中に占める位置を特定する必要がある。そこで本発表では、この試みを、三つの局面から成るものとして再構成する。これによって、現代の意識研究における諸概念や、過去の哲学者の考え方を／に投影するだけでは見えてこなかった、ベルクソンに特有の哲学的議論の進め方を明示したい。あらかじめその「特有」な点について述べておけば、それは次のように言い表すことができる。すなわち、哲学的議論において一般に用いられる、論敵の困難と自説の利点を指摘・比較するという所作が、ここでは十分な効果を発揮しないものとして扱われているのである。ベルクソンは、対立する既存の説を比較し、その良し悪しを評価するだけでは、自説を肯定するには不十分だと考えていたと思われるのだ。なぜ彼はそう考えたのか。その理由を解明して、実在と経験の関係にかんする彼の考え方を明らかにすることが、本発表の最終的な目的となる。

トゥールーズで発見されたデカルト『省察』 印刷前の写本をめぐって

平松 希伊子

2016年夏、アメリカアーカンソー大学のジェレミー・S・ハイマン（Jeremy S Hyman）講師によって、17世紀の写本がトゥールーズ市立図書館で発見された。去る6月6日にソルボンヌで行われた氏の報告会に幸運にも立ち会えた唯一の日本人として、その概要を会員諸氏にお伝えしたい。

主著『省察』公刊（1641年初版、1642年第二版）の際、デカルトが「反論と答弁」を付したことはよく知られている。第一反論は見本としてデカルト自身の依頼で作成されたが、第二から第六はパリのメルセンヌが仲立ちをした。今回発見されたのは、メルセンヌがデカルトの手稿を誰かに書き写させて（おそらく反論してもらうことを念頭に）フェルマに送った写本と思われる。それを裏付ける状況証拠は以下の通り。1641年3月2日付メルセンヌ宛書簡でデカルトは「フェルマには送ってくれるな」と頼んでいる（AT-III, p.328）。しかし、時すでに遅しかったのか、メルセンヌが頼みを無視したのか、モンペリエ在住の数学者兼医師ボネル（Bonnel）がフェルマと共に写本を読んだと五年後に証言しているのである（1646年7月2日付メルセンヌ宛CM-XIV, p.322）。結局フェルマは反論しなかったのであるが。

トゥールーズ写本と印刷版『省察』の間にはいくつかの違いがある。例えば、各省察の表題が、第一と第四を除いて長くなっている（例、第三 De Deo. → De Deo, quod existat.）し、筆者の写し間違いと見られる箇所もある。また、写本の表題には *Meditationes* という言葉はなく、単に *Prima philosophia* とのみ記されており、このことが写本の存在が長く知られなかった理由の一つであろう、と推察された。

写本と印刷本の異同のリストアップやその意味合いの考察については、発見者ハイマン氏が近々詳細を公表されると思うので、私は立ち入ることを控えたい。そして概要報告後の残り時間で、上述のボネルについてわかったこと（ソルビエールの友人でメルセンヌを中心とする当時の学者共同体への参入を熱望、コペルニクス説を熱烈擁護、形而上学という土台の上に自然学その上に諸学を築くというデカルトに似た学問構想所有）を紹介する。

【追記】学会発表後にハイマン氏と連絡が取れ、ガリマール社から公刊されるデカルト著作集第四巻所収予定の、写本についての詳しい注釈を送っていただいた。さらに単行本も準備中とのことなので、この写本に興味のある方は是非それらを参照されたい。

ベルクソンの形而上学における実証性について

持地 秀紀

（上智大学大学院哲学研究科哲学専攻）

ベルクソンは1901年のフランス哲学学会の報告のなかで、彼自身の形而上学を「実証的形而上学」(une métaphysique positive) と称している。この「実証」という用語は、これまで一般的には、ベルクソンの形而上学の方法論を当時の実証科学の方法論と結びつけることを可能にする用語として解釈されてきた。すなわち、形而上学は科学と同様に、われわれの経験の内に与えられる諸事実を出発点とし、その「事実の線」を拡張していくことで、少しずつ蓋然性を高めながら、確実なものへと接近していく学として考えられるのである。実際、ベルクソンは「実証科学と同じように哲学は進歩するでしょう」(ES, 15) と述べている。

このように解されるかぎりでは、「実証」という用語は形而上学と科学において共通の意味で捉えられることになる。しかしながら、1907年の著作『創造的進化』のなかで、ベルクソンは形而上学における「実証性」を科学における「実証性」から区別する。このことは次の一文のうちに読み取れる。「物理学者と幾何学者にとって実証的なものに見えるすべてのものは、この新しい観点においては、心理学的な用語で定義されなければならない真に実証的な実在の、中断ないし反転になるだろう」(EC, 209)。ここでは科学における「実証的なもの」が形而上学における「真に実証的な実在」の「中断ないし反転」として捉えられており、ベルクソンが形而上学のうちに認める実証性が科学的な実証性とは異なるものであることが示されている。

本発表の目的は、この『創造的進化』において語られる、ベルクソンの形而上学における実証性の意味を明らかにすることである。以下の手順で考察を進める。

まず、われわれは『創造的進化』のなかで、ベルクソンが生命に対する「形而上学的な説明」と「科学的な説明」とを区別している点に注目し、そこにおいて「実証」の用語が科学の側ではなく形而上学の側に結び付けられている点を確認する。こうしてベルクソンにおける「実証」の用語法の転換を確認した上で、次に、何故この形而上学的な実在の側に「実証」という用語が結びつくのか、その理由を考察する。ここでわれわれは、ベルクソンの用語法が彼のプロティノス解釈を通じて形成されたものであるという点を、『時間概念の歴史』講義（1902-1903）との関連を踏まえて論じる。そして最後に、『創造的進化』で提示される形而上学の「実証性」がどのような意味をもつのかを、この用語を実証科学の「実証性」と結びつける従来の解釈とは異なる視点から、解明したい。

アンリ・ルフェーヴルにおけるスタイルと欲望 ——「人間の生産」と『空間の生産』の接合点をめぐって——

山本 千寛

アンリ・ルフェーヴルの主著『空間の生産』（1974）に先立つこと35年、『弁証法的唯物論』の後半部が「人間の生産」と題された点や、これらふたつの「生産」の接合点と連続性については十分に問題とされてこなかった。そこで本報告では『メタ哲学』（1965）における〈文化－スタイル〉と〈欲求－欲望〉という相重なる対概念を主な参照軸として、かれの視点が人間から空間へとむかう道筋とその接合点を明らかにすることを試みる。

そもそも「人間の生産」の目標は「可能な個性の無限の多様性のなかで発達した個性」としての全体的人間であった。つまり、人間の生の「開かれた全体性」を捉えることがひとつの課題であり、そこに同質性にとどまらない生のあり方の理想が位置づけられた。『メタ哲学』においてはまさにこの全体性を上手く捉えきれないことが、哲学的理性の一つのアポリアとして提示されるのだが、そこで問題とされるのは生の「スタイルの欠如」であり、欲望をもたず欲求だけを持つ同時代人像である。つまり上述の各対概念における後者の不在が弁証法的運動を不可能にし、全体的人間の実現を妨げると考えられる。

同質化の問題としてのスタイルの剥奪あるいは不在は1961年以降、日常生活における倦怠やモデルニテの問題点——『メタ哲学』ではこれが文化の問題として論じ直されるのだが——という実践的課題として指摘される。しかし理論的文脈においても、ロラン・バルトの論文「構造主義的活動」で示された「構造的人間」の思考や行動のスタイルが同じくスタイルの欠如として批判的に捉えられており、ルフェーヴルはこれらの実践的・理論的問題意識を融合させながら、スタイルを重視する立場を鮮明にしていってと指摘できる。

同書では文化とスタイルはそれぞれ欲求の水準、欲望の水準にあるものとして対応的に定義されており、ふたつの対概念は重なることがわかる。のちに『空間の生産』においてこれらの水準は、個々の対象に結びつき満足と不満足の反復を繰返す受け身的な「欲求」と、能動的な生産や創造によって差異を生み出す、そのエネルギー源としての「欲望」として論じられるのだが、本報告はこうした議論の端緒として『メタ哲学』におけるスタイルの土台としての欲望をめぐる議論を整理し、「欲求と対象の出会いの場」としての空間という構想への道筋を示す。

以上の考察から「何かを『作る』という欲望」の実現が空間の生産によって唯一可能となるといって1974年の議論の背景が明らかとなる。すなわち、全体的人間を志向するうえで現実に欠けているものとして60年代に導入された「スタイル」、「欲望」概念がひとつの接合点となり、同質的な現実に差異を与える実践としての空間の生産へと向かうことが検証される。

artificeの哲学と〈雀蜂 - 蘭〉の機械状生態学： フェリックス・ガタリ『アンチ・オイディプス草稿』

山森 裕毅

（大阪大学CO*デザインセンター 特任講師（常勤））

【発表要旨】

本発表は、「フェリックス・ガタリが再三参照する〈雀蜂と蘭の結婚〉をひとつの事例研究だと考えると、それによってガタリは何を示そうとしているのか」という問いを扱うものである。そしてこの問いに対して、『アンチ・オイディプス草稿』から〈artificeの哲学〉と応えるものである。

『アンチ・オイディプス草稿』は、ガタリが『アンチ・オイディプス』を作成するにあたって、共著者であるジル・ドゥルーズに送った手紙や日記などが集められ編集されたものである。公表を念頭においた資料ではないため、断片的であったり、考えが二転三転したり、論理展開が欠如していたりする。それでも丁寧に読んでいけば、このなかでしか触れることのできないガタリの思考が確かに存在する。それはドゥルーズとの共同作業のなかで篩にかけられ、『アンチ・オイディプス』では採用されなかったものであり、ガタリに固有の思考だといえる。

そのひとつにartificeという概念である。ガタリはこれを自然と対立させている。ドゥルーズに宛てた手紙のなかで、ドゥルーズが自然哲学の立場から受け入れようとしないうartificeという概念を、ガタリは強く擁護している。形容詞形のartificielも含めて、『アンチ・オイディプス』では登場回数は少なく、使われるときは否定的なニュアンスを込められているが、『アンチ・オイディプス草稿』では最頻出語のひとつであり、その多くが肯定的なニュアンスで使われている。

artificeは通常「人工物」と訳される用語であるが、本発表ではartificeについて「機工物」という訳を当てることにしたい。というのも、ガタリは無意識や現実的なもの、欲望、雀蜂と蘭の共生といった、人が製作することのできない物に対してまでこの言葉を適用するからである。artificeとは、ガタリによるその使用法を追いかぎりで「機械」と「記号」によって機能し、生産されていくもの全般に対して使われる上位概念といえる。さらにいえば、ガタリの初期の世界観を表す概念とみなすことができる。

本発表は、『アンチ・オイディプス草稿』の時期にはartificeの哲学が構想されていたと主張する。これは『アンチ・オイディプス』の自然哲学とははっきりと区別されるものである。本発表では、〈雀蜂-蘭〉の共生関係をこのartificeの哲学の具体的な思考対象として捉え、詳細に取り上げる。そのなかで重要になってくるのが、ルイ・イェルムスレウの言理論とチャールズ・S・パースの記号論、そして「コード拡張」という考え方である。これらがどのように機能して〈雀蜂-蘭〉の共生関係を成立させているのか、機械状生態学とも呼べるその論理を明らかにしたい。

全体を通して、artificeの哲学がガタリに開いた機械と記号による思考法を取り出すことを目指す。